

M-GTA 研究会 News Letter No.78

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: <http://m-gta.jp/>

世 話 人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第8回修士論文発表会の報告

【第1報告】(中間発表) 3

嘉陽田 友香：総合周産期母子医療センターで働く助産師のキャリア発達に関
連する要因

【第2報告】(中間発表) 13

石原 佳弥子：地域日本語教育を担うボランティアの日本語教育のあり方への
意識の変化の考察

【第3報告】(成果発表) 23

伊藤 由美子：大卒難聴者の職場適応へ向かうプロセス

◇近況報告(領域／キーワード)(五十音順) 35

唐田 順子(看護学／妊娠期からの子育て支援)

斎藤 まさ子(精神看護学／ひきこもり)

◇第73回定例研究会のお知らせ 36

◇編集後記 36

◇第8回修士論文発表会の報告

【日 時】2015年7月25日(土) 13:00～18:00

【場 所】大正大学7号館5階755教室

【出席者】106名

青井 耕介(首都大学)・浅川 雅美(文教大学)・阿部 正子(長野県看護大学)・安 瓊伊(白梅学園大学)・石塚 千賀子(新潟大学)・石原 佳弥子(一橋大学)・石渡 智恵美(共立女子大学)・泉田 貴美子(下越病院)・伊藤 尚子(立教大学)・伊藤 由美子(日本福祉大学)・Oh Yunhee(筑波大学)・大石 甲(障害者職業総合センター)・大塚 栄子(千葉リハビリテーションセンター)・小川 洋子(日本女子大学)・小倉 啓子(ヤマザキ学園大学)・落合 賀子(順天堂大学)・小貫 早希(聖路加国際病院)・霍 沁宇(一橋大学)・梶原 はづき(立教大学)・香月 静(障がい福祉センターあしすと)・嘉陽田 友香(沖縄県立看護大学)・唐田 順子(国立看護大学)・河原 克俊(イムス板橋リハビリテーション病院)・河本 恵理(山口大学)・姜 英順(法政大学)・木下 康仁(立教大学)・木村 一輝(東京工業大学)・木村 菜月(東京大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・小泉 香織(さがみリハビリテーション病院)・古城 恵子(目白第一保育園)・小林 茂則(聖学院大学)・小松 祐子(筑波大学)・小山 道子(上武大学)・斎藤 まさ子(新潟青陵大学)・齊藤 葉子(日本社会事業大学)・坂本 智代枝(大正大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・佐久間 浩美(了徳寺大学)・櫻井 清美(足利工業大学)・佐藤 聡子(国際医療福祉大学)・佐藤 隆也(筑波大学)・清水 弘美(希望の郷)・鈴江 智恵(日本福祉大学)・鈴木 宏幸(袖ヶ浦さつき台病院)・鈴木 康美(日本保健医療大学)・清野 弘子(福島県立医科大学)・田垣 美紀子(春日井市民病院)・高津 英俊(高崎経済大学)・高丸 理香(お茶の水女子大学)・竹下 浩(職業能力開発総合大学校)・竹渕 由恵(群馬県立県民健康科学大学)・館岡 周平(河北リハビリテーション病院)・田中 満由美(山口大学)・田原 ゆみ(昭和音楽大学)・玉城 清子(沖縄県立看護大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・千野 洋見(NPO 法人 FTC アドボカシーセンター)・辻村 真由子(千葉大学)・詰坂 悦子(順天堂大学)・寺崎 伸一(ジャパンケア川崎日進)・富樫 和枝(了徳寺大学)・時田 純子(西武文理大学)・中川 真美(雷門メンタルクリニック)・仲根 よし子(つくば国際大学)・中野 真理子(自治医科大学)・長山 豊(金沢医科大学)・生天目 禎子(東京女子医科大学)・西巻 悦子(筑波大学)・根本 愛子(国際基督教大学)・根本 淳子(愛媛大学)・橋本 章子(帝京大学)・橋本 麻由美(国立国際医療研究センター)・林 裕栄(埼玉県立大学)・林 葉子(お茶の水女子大学)・広瀬 安彦(日本生産性本部)・前田 和子(茨城キリスト教大学)・前原 和明(障害者職業総合センター)・McDonald Darren(大東文化大学)・真島 理美(町田市保健所)・増田 尚子(鶴舞看護専門学校)・松戸 宏予(佛教大学)・松本 三知代(早稲田大学)・松本 有希(浜松医科大学)・松本 裕紀子(筑波大学)・三木 晶子(東京大学)・水尾 智佐子(帝京大学)・光橋 さおり(自衛隊中央病院)・三ツ橋 由美子(国際医療福祉大学)・光村 実香(訪問看護ステーションあおぞら)・光行 多佳子(名古屋大学)・緑川 綾(慶應義塾大学)・宮崎 玲(放送大学)・宮崎 貴久子(京都大学)・宮松 卓也(国際医療福祉大学)・森田 久美子・矢島 正榮(群馬パース大学)・山川 伊津子(ヤマザキ学園大学)・山崎 ひろ子(神奈川大学)・山崎 浩司(信州大学)・山田 牧子(共済学園日本保健医療大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・米田 裕香利・劉 楠(お茶の水女子大学)・若林 馨(国際医療福祉大学)・渡邊 節子(名古屋市立大学)

【第1報告】

嘉陽田友香（沖縄県立看護大学大学院 保健看護分野）

Yuka KAYOUDA : Okinawa Prefectural College of Nursing of Health Nursing

総合周産期母子医療センターで働く助産師のキャリア発達に関連する要因

Factors related to the career development of midwives working in Perinatal Medical Center

1. 研究背景

少子高齢化が進む我が国では、女性を含む全員参加型社会の構築が求められている（厚生労働省，2011）。女性も職業を通して社会貢献が求められており、また女性自身も職業を通しての自己実現を望んでいる。男性のキャリアは連続性と発展性は自然に行われているが女性の場合は家庭を維持する役割があり、女性の職業人としての連続性と発展性のあるキャリア形成は、「本人」「家庭」「職場」の3つの側面から支援を得られないとキャリア形成の機会は十分ひけない（若林，1983）。社会が求める働き手として、女性は自らのキャリアをめぐる問題と向き合い、キャリア形成について主体的に考える必要がある（矢澤，2009）。

アメリカにおいては性別役割分業の伝統が女性のキャリアに影響していたが、1970年代から女性のキャリア問題についての研究が取りあげられ始めた（草刈，1996）。Supper（1980）はキャリアとは人の一生の間に演じられる役割の結合と連続で、性別と関連づけられた役割はないとした。またHansen（1997）は女性の職場進出に伴う家庭内における男女のパートナーシップの必要性和、充実した人生を送るためには仕事・愛・学習・余暇をうまく統合させる「統合的人生設計」を述べている。

女性が多い看護師の専門職業人としての成長を支援するために「キャリア開発モデル」が示され（Kleinknecht.R.S&Zbleman E, 1982; 草刈淳子, 1996）、キャリア開発は看護師の仕事の満足度を増加させ看護のレベルを維持する上からも有用である（Sovie, 1982, 1983）と報告されている。またSovie（1982）は病院看護師のキャリア発達を促進するためのモデルの概要を述べる中で①専門家としての認識、②専門性の熟成、③専門性の達成の3要素をあげている。

日本では、看護教育の大学化が進められ（看護婦等の確保を促進するための措置に関する基本的な指針，1992）、さらに1990年代には専門看護師の教育も進み、専門職の中の専門化が進み、自分自身の新たな目標を自らのキャリアにおいて問い直す看護師が増えてきている（グレッグ，2003; 吉田，2013）。つまり、専門職として看護を追求することによりキャリア発達の基礎がより強固となり（グレッグ，2003）、専門的・職能的能力のキャリア志向の特徴を生かし、様々な技能や開発ができるよう看護提供システムや評価システム開発が求められる（坂口，2004）。

保健師助産師看護師法により正常な妊娠分娩は助産師独自の判断で助産行為ができ、分娩が安全に終了することは仕事のやりがいにつながり（古川，2010）、このような経験を繰り返すことで自

己実現に向う(高島, 2008)。また、助産師は同僚と臨床実践についての意見交換、つまり助産師同士の社会的相互作用の影響を受ける(Halldora, 1996)。したがって助産師の継続教育の達成には個人がその価値を実感するとともに、管理者・教育者・同僚からのサポートや環境が必要である(Author, 1997)。しかし、現代社会では晩婚化による高齢出産の増加、生殖医療技術の発達によりハイリスク妊産婦・新生児が増加している。このような状況下では助産師同士や医師、ならびに他の専門職と相互の交流を通じてケアの質を向上していかなければならない。また、助産実践能力を高めるために2012年には看護師に遅れ「新卒助産師研修ガイド」「助産師のキャリアパス」「助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)」が公表され、他施設への出向制度など助産師のキャリア発達支援が始まり、自ら研鑽し助産師としての資質を高める責任が求められている。

かつて日本は他の先進国と比較して妊産婦死亡率が高かったため、それを解消するために1996年、各地に総合周産期母子医療センター(以下周産期センター)を設置した。周産期センターは、母体・胎児集中治療室(maternal and fetal intensive care unit;MFICU)および新生児集中治療管理室(neonatal intensive care unit;NICU)を備え、常時、母体および新生児搬送を受け入れ24時間質の高いケア提供ができる医療施設である。第三次医療機関としての周産期センターはハイリスク妊産婦・新生児への医療を提供しているが、同時に安全性や質の高い医療を求めてくるローリスク妊産婦も受け入れざるを得ない状況である(遠藤, 2012)。助産師をバーンアウトに至らせる要因に、医療システムの複雑化、高度な医療技術のための複雑な医療機器の使用、濃厚な治療、他職種との協働のために調整、多くの心理・社会的問題をもつ妊産婦とその家族の増加などがあげられる(宮川, 2012)。また、助産外来で異常を見逃す事への恐怖心と自信のなさがあり、助産師教育の見直しと医師との理解と協力を得ることの必要性もあげられている(鷹巣, 2013)。常に緊張状態で、現状の先の予測を行いながら働く周産期センターの助産師のキャリア発達には様々な要因が影響してくることが考えられる。

助産師の能力を十分発揮している病院勤務助産師のキャリアに影響する内容・方法・時期について明らかにした研究はあるが(木村, 2003)、高度で複雑な助産師の力が求められる周産期センターで働く助産師のキャリア発達過程に焦点をあてた学術的研究は少ない。そこで周産期センターで働く助産師で常に自己研鑽し、他の助産師や学生からモデルとなる助産師のキャリア発達プロセスを明らかにすることは、専門職者としてのキャリア発達を高める手段を明らかにし、新たな支援の方法を見出すことに役立つと考え、本研究に取り込むこととした。

※用語の定義

キャリア発達：職業と個人的な経験、さらに環境要因によって形作られる成長の過程と定義する。

2. なぜ M-GTA がこの研究に適していると考えたのか

本研究は助産師のキャリア発達プロセス追求するものであることから、修正版グラウンデッド・セ

オリ・アプローチ Modified Grounded Theory Approach(以下、M-GTA)を用いて分析する。M-GTA は現象のプロセス性、他者との相互作用性、ヒューマンサービス領域における支援のための理論生成を目指すもので、以下の点から M-GTA が適切であると考えた。

1) 社会的相互作用を扱う

周産期センターで働く助産師は、ケアの対象者と関わるだけでなく医師や助産師および他の専門職等の様々な医療スタッフと連携し働いており、その中で社会的相互作用を通して自らのキャリアを発達させていると考える。

2) 研究しようとしている現象がプロセス的性格をもつ

周産期センターで働く中で、これまでの助産師としての役割のあり方の違いやハイリスクの患者・医療従事者との相互作用を通して自らの助産師としての役割を明確にし、周産期センターの助産師としてキャリアを発達させていく過程がある。

3) 理論を生成し、実践的活用を目指している

専門職者としてのキャリア発達を高める手段を明らかにし、新たな助産師の支援の方法を見出すことにつながる。

3. 研究テーマ

総合周産期母子医療センターで働く助産師のキャリア発達

4. 分析焦点者

総合周産期母子医療センターで働く助産師

5. 研究方法

1)協力施設

A 県の総合周産期母子医療センター2 施設。産科病棟 30～40 床(MFICU を含む)、NICU30 床(GCU 含む)を有する。今回は産科病棟(MFICU を含む)で働く助産師を研究対象とした(医師 10 人程度、助産師数 40 人程度、看護師 10 人程度)。救命救急病院で年中無休 24 時間体制。様々な合併症を有する妊産褥婦が多く、緊急性が高い。分娩件数は約 1000 件(約半数が帝王切開)。

2)参加者選定基準

A 県内で働く以下の条件を満たす助産師

(1)総合周産期母子医療センター産科棟・MFICU で一年以上働く助産師

(2)助産師経験 5 年以上の者

(3)知識・技術・態度だけでなく働く姿勢や自己研鑽する姿勢などモデルとなる助産師(例えばリーダー的役割・指導者としての役割を担っている、また自己学習や研究に積極的に取り組み

自己研鑽する姿勢を持つ者など。クリニカルラダーでいうとレベルⅢに到達している者)

研究協力者は10名程度

3)対象者へのアクセスと研究協力依頼

(1)協力施設の施設長及び看護部長へは、研究目的・方法及び倫理的配慮について、依頼文書をもとに口頭で説明し、承諾書への署名をもって研究への承諾を得る。

(2)総合周産期母子医療センター師長へ研究目的・方法及び倫理的配慮について研究計画概要をもとに口頭で説明し、基準に該当する助産師を病棟師長に選定してもらい推薦を依頼する。紹介してもらった研究対象候補者には、研究者から改めて研究計画概要について説明し、研究協力を依頼する。研究の同意を得られた後に、研究協力者から同意書もらう。

4)データ収集の方法

(1) インタビューガイドに基づき60分程度の半構造化インタビューを行う。

① 助産師になりたいと思ったのはいつですか？そのきっかけは？

② 助産師になったとき、どのような助産師になりたいと思いましたか？

③ 周産期センターで働いて、どのようなことがあなたのキャリアに影響を与えましたか(人との出会い・役割・出来事)？

④ 周産期センターで働いて、自分が成長したと思うことはなんですか？

⑤ 周産期センターで働く助産師の役割はなんだと思いますか？

⑥ 今後あなたは助産師としてどうありたいと思いますか？

(2) 研究協力者の語りはICレコーダー等を使用して録音する。

(3) 表情や態度をフィールドノートに記載し分析の際に使用する。

6. 3つのインタラクティブ性のうち、1つ目と3つ目に関する具体的内容と考え

① 研究者と協力者

研究者は筆者である。筆者自身総合周産期母子医療センターで働いた経験がある助産師である。協力者は助産師歴5年目以上であり総合周産期センターで1年以上働いた経験のある助産師12名である。

② 研究者と応用者

応用者は周産期センターという環境の中で、助産師としての自己の役割を構築していくことで、周産期センターでの自己の立ち位置が明確になり働き続ける事ができると考えた。

7. 分析テーマ

総合周産期母子医療センターで働く助産師が助産師としての役割を再認識し、さらに役割を発

揮するための環境を構築していくプロセス

8. 現象特性

従来の助産師としての役割を総合周産期母子医療センターという特殊な環境の中で、助産師としての自己の役割を意味づけし、今まで培ってきた自己像を周産期センターに適応させながら、自信の助産師像を作り上げていく。

9. 結果図とストーリーライン

当日回収資料

10. 分析ワークシート例

当日回収資料

11. カテゴリー生成

【役割期待への回答】

〈産科に関する病棟を含め患者のために皆で学ぶ〉と〈助産師の力を発揮できる病棟〉〈役割期待へ答える〉の概念の関係から説明する。

〈産科に関わる病棟を含め患者のために皆で学ぶ〉

病棟超えてではないですけど。こんどグリーフケアに関して 4 階の婦人科を抱えている外科と勉強会をすることになって…ちょっと進歩ですよ。…グリーフ(死産)の患者さんを出産した後、上(婦人科病棟)で預かってもらって退院してもらう事が多くなっているので、向こうも(死産を経験した患者さんに)どう対応をどうしたらいいかわかんないっていうのもあるし、こっち(周産期の助産師)もなんで(産科と同じようにケアを)やってくれないのっていうのもあるしお互い視線を同じようにするように(勉強会をする)。…こう、(産科に関係する他の病棟のスタッフと周産期のスタッフが)近寄れたらいいなって思うんですけど。

今までは忙しさで他科にいった患者さんについて助産師としてケアしてあげられないもどかしさやケアがされていないことに怒りを感じていただけだったが、初めて産科に関係する他の病棟と勉強会をすることになり、患者のために病棟単位で動いている。助産師としてよいケアが提供できるように進み始めていると考える。

〈助産師の力を発揮できる病棟〉の具体例

(周産期に)入ったときは助産師がお産を取れなかったのを、あんまり助産師っていう、自分達助産師ってこういうことができるんだよってものすごく発揮できてないと感じていました。本当は助産師としてもっとできることがあるはずだって思ってた時に、いまからこういうこと(助産師の力が発揮できること)をやっているっていう時だったんですよ。助産師もお産をもっとやっているとかが学生指導をやっているって助産の学生指導が始まったり、忙しさで縛られていたのに、病棟が変

わろうとしているのかなって思っ…経験してきた人たちがすこしずつお産を取り、こんな事(助産師は分娩介助)ができるんだなって(医師に)みせることができたのかなって思うんですけど。

周産期だから分娩介助ができないのではなく、〈助産師の力を発揮できる病棟〉にすることで助産師はやりがいのある病棟に変えていこうとしている。

この2つの概念をあわせてサブカテゴリー《改革》とした。

また〈役割期待へ答える〉については

師長がぜひJさんおっぱい中心にやって欲しいから(研修の責任者を)ぜひやってみて。(絶対この病院で母乳の研修ができるわけないし、自分が責任者としてできるわけないって思ってたから)嘘だっと思ったけど…でもそれから(研修は)続いているからね、三回か四回やっているからね。そういうのも師長に言われて先生とコーディネイトして内地の人2人ファシリテーターがきたからね。メールをやりとりして会場をどうするか機材をどうするかまとめたり、患者さんを選定したりとかそういうのもさせてもらって、ちゃんと軌道にのってくれたからね(とても自分の自信につながった)。

期待され役割を実施することで自信につながりさらにそれに応えようと継続していく〈役割期待へ答える〉ことがみられた。こうした3つの概念は助産師としての【役割期待への回答】としてあらわされるのではないかと考えた。

12. 発表義務の有無、所属機関での指導状況

平成26年10月～平成27年3月までで12名の助産師のインタビューが終了し、分析中。指導教員による研究指導とは1～2週間に1回のペースで指導を受けている。平成27年10月結果検討会、平成28年1月には中間発表会を予定している。今回長山先生(M-GTA研究会)から平成27年6月下旬からメールにてご指導を頂いた。

13. 会場からのコメント概要

- ① 参加者選定基準でモデルとなる助産師とあげているが研究者の中ではどのような人をさすのか？ この部分をはっきりさせないと研究の目的が明確にならない。
- ② 周産期センターではどのような人が働いているのか？ 例えば別の病院で働いてきたベテランが周産期センターにキャリアを積むために異動してくる人が多いのか、新人から周産期センターで働いてきている人が多いのか。今回対象を分けていないが、それによって助産師のキャリアはだいぶ変わってくると思う。
- ③ 総合周産期センターというとNICU、MFICUがあり、ケアする対象が子供側またはお母さんが中心かで助産師のキャリアが違って来ると思う。タイトルで総合周産期母子医療センターで働く助産師とすると産科側かNICUどちらで使われるかわからない。今回開発した理論を産科で使いたいならタイトルに産科病棟と入れないと読みてに提供できないと思う。方法論的には限定しないといけないためタイトルを修正すべき。

- ④ 参加者の選定基準について詳しく説明した方がよい。総合周産期センターでの経験年数によってもキャリアは違ってくるのではないかな？
- ⑤ データー収集について、なぜこのようなインタビューガイドを作ったのか？ 学生時代から今後どんな助産師になりたいのかと未来に向けて始点と終点が大きい。結果でどこまで語られているかと分析テーマとの関連につながってくると思う。分析テーマを見る中では、限られたフィールドの中で助産師としての自分の役割を今までの分娩介助できた環境での既成概念をすてて新しい役割をみだし、修正して環境を作っていくとあるが、インタビューガイドの説明では自分が助産師になろうと思った時、いわば助産師としてのアイデンティティ形成始めるところから長い助産師生涯のなかで総合周産期センターでのキャリアをどうとらえるのかともいっている。プロセスの視点と終点を広くおくのか、それとも周産期センターに特化したものにするのか、全く経過が変わってくると思う。キャリア発達はライフスパンの視点からみるのか、あるいはこのフィールドに特化したものなのかを考える必要がある。
- ⑥ 研究する場を周産期センターにした根拠を自分の言葉で伝える必要がある。視点と終点をきめるのは大事。周産期センターならではの助産師のあり方を知りたい人が多いと思う。ハイリスクの人が多くなっている時代なのでそういう中で周産期センターでの助産師はこうやって成長しているんだってわかればいいと思う。
- ⑦ 今回の発表で分析テーマに到達するのがやっとなのは、どこに焦点を絞っていいのかが明確になっていないから。デジメでの流れでは女性のキャリア→看護師のキャリア→助産師のキャリアにあって最終的にはバーンアウトやそこで働くしんどさを書いてあり、何に関心があるのか明確になっていない。この研究成果が何に役立つのかを明確にすること。
- ⑧ キャリアやハイリスクなどわかった言葉をあげているが、ハイリスクとは？ 周産期センターとはなんぞやをきちんとかみ砕いてかくこと。
- ⑨ 助産師というと正常な経過の分娩介助ができるのが他の職種と違う部分。また、周産期センターで働く助産師は出産よりも他職種と連携してハイリスク妊産褥婦のケアにあたっているところが一般の産科で働く助産師と異なる点である。周産期センターで働く助産師がどういう影響を受けて助産師像を明らかにしたいのか、周産期センターで働く助産師としての自己概念の形成プロセスを明らかにすることがこの研究だと思った。

14. 発表を終えての感想

今回このような貴重な場で発表の機会を与えていただきありがとうございました。SV の長山先生には丁寧にご指導していただき大変感謝しております。

まず初めに長山先生からなぜ「総合周産期母子医療センター」というフィールドに限定して助産師のキャリア発達をみたいと考えたかという課題をいただきました。この研究のきっかけは①周産期センターで働いている時、助産師としてのやりがいを感じられなくて辛かったこと②教育現

場や学会で今の助産の現状が昔とは違う環境になっていると違和感を感じたこと③ICM の提言に矛盾を感じたこと④ラダーは周産期センターにはあわないこと⑤助産師自身がかかわってきていると感じたことからです。これらのことを研究背景で説明しているつもりでも発表場面では指摘され、うまく伝わっていないことがわかりました。具体的に何に研究的関心があるかを突き詰めていくことが、分析テーマを明確にすることにつながるという長山先生のお言葉の意味を実感しました。また、フロアの皆様からご意見やご提案を頂き、大変貴重な学びと発見をえることができました。

今回の発表で様々な分野の研究者の方々に聞いてもらうことで、言葉にすることの難しさも実感いたしました。研究する場をなぜ周産期センターにしたのか、どこに焦点を絞るのか、この研究成果が何に役立つのかを明確にし、自分の言葉で伝えることができるようにすることが今の私の課題です。今回の学びを活かして分析をやり直し、皆さんへ自分の課題をきちんと示せるような修士論文を書き上げたいと思います。本当にありがとうございました。

【SV コメント】

長山豊（金沢医科大）

今回、SVをさせて頂くうえで、嘉陽田さんが本当に明らかにしたいことは何なのか、という研究的関心を明確化するために、研究テーマのバックグラウンドおよび目的についてできるだけ丁寧かつ具体的に説明していただくことを意識して進めました。発表前のやり取りにて、嘉陽田さんが明らかにしたい助産師のキャリアとは何を指すのか、この研究は助産師の特定フィールド内での臨床実践および現任教育にどのような位置づけで活用されるのか、など様々な関心が生じました。そして、研究会の場においては、嘉陽田さんは丁寧かつ真摯にご自身の言葉で説明されようと尽力されており、私はじめ、フロアの皆様も非常に刺激を受ける機会になったのではとっております。総合周産期母子医療センターにおける助産師としての専門性・役割を明確化していくという点で、産科領域の救急機関として地域に不可欠なフィールドに着目され、非常に臨床的に価値の高い研究であると感じました。

まず、研究テーマおよび分析テーマの設定について、当日のディスカッションを踏まえて述べます。先行研究やご自身の体験より、助産師は正常分娩の介助において助産師独自の判断で助産行為ができるため、仕事のやりがいとして捉え、自己実現につながることを前提とされていました。しかし、総合周産期母子医療センターの助産師は、助産師の自律的な職務役割が発揮できず、助産師としてのアイデンティティーと現場で求められる役割との間で役割葛藤を生じている印象を持ちました。嘉陽田さんは、当日のディスカッションの中でも、総合周産期母子医療センターでは合併症を抱えたハイリスク分娩の妊産婦に対する疾病管理が優先されるため、基本的に助産師は医師の指示下で動かなければいけない現状に不全感を感じやすいことが語られていたと思います。

そのため、この研究の目的・意義を考えると、助産師が自律的に役割を遂行できていないと不安全感を感じている現状を打破するために、この総合周産期母子医療センターという組織特性ならではの助産師に求められる臨床実践能力をどのように開発・発達させてきたのか、対象者が安心して分娩に臨めるように助産師としての役割・在り方をどのように形成していったのかを明確化することにあるのではないかと考えます。総合周産期母子医療センターでの役割および機能が発達していくプロセスが提示されることで、このフィールドにおける成長・発達を踏まえた新人教育、および、このフィールドに特化したクリニカルラダーのような専門性を熟達させていく教育プログラムの開発につながり、助産師が自己の役割に誇りを持って活躍できるようになるのではないのでしょうか。キャリア発達という長期的なライフワークの視点からみると、総合周産期母子医療センターでの経験は限定的な職務経験であり、様々な個別の助産師観やアイデンティティーの中で位置づけられ、焦点が拡散してしまうことが危惧されます。この現場ならではの臨床家として求められる役割の中で、助産師がどのように変容していったのかという点で研究テーマおよび分析テーマを再考されたら良いのではと考えております。

そして、当日のご発表では概念生成の段階までディスカッションが行かず、本当に申し訳ありませんでしたが、ご提示して頂いた資料を通してコメントをさせて頂きたいと思います。まず、結果図とストーリーラインを見たときに、「これは、このフィールドに限らず、どの看護の領域でも生じる概念ではないのか？」という考えを抱きました。新人看護師、あるいは、異動してきた看護師がその職場で求められる役割を十分に発揮することができない、知識・技術・経験の不足を徹底的に痛感し、その穴を埋めるために必死に学習し、そのフィールドでモデルのようなナースに近づけるよう努力していく過程で徐々に適応していくというプロセスであり、あまりこのフィールドならではの組織特性・特殊性が概念化されていないと感じました。たとえば、総合周産期母子医療センターならではの＜グリーフワークの重み＞などの概念も生成されていましたが、助産師がこの職務上の課題に対してどのように臨床実践能力を磨き、どのようにケア提供できるようになったのか、という助産師の役割の熟達・変化がみえませんでした。しかし、提示された分析ワークシートのバリエーション例を読んでいくと、分娩にいたるまでの妊産婦との時間の共有の仕方、母乳育児への支援や家族計画などの保健指導など、研究参加者が自分の役割を積極的に見出して、スキルを磨いている様子が伺えました。つまり、データには役割葛藤を乗り越えて、このフィールドで生き活きと活躍している助産師の有り様が語られており、そのような臨床実践能力や役割をどのように見出していったのか、1 つ 1 つのバリエーションを継続的比較分析の視点をもって丁寧に分析していくことが大切です。思考のログといわれる理論的メモに、なぜそのデータに着目したのか、という解釈の足跡を丁寧に残していくことで必ずデータに密着した分析につながっていきます。データ分析の最初の段階である、バリエーションの意味を分析テーマに沿って解釈するという手順を着実に積み上げていくことが、説明力のある概念生成に至ります。とにかく焦らずに、じっくりとデータと向き合う時間を確保し、このフィールドの中で助産師がどのように変容していったのかという「うごき」を掬い取れるように検討を続けていただけたらと思っております。

最後に、初めてのSVで拙い面が多々ありましたが、嘉陽田さんが真摯にデータと向き合われ、

やり取りの中で何度も分析テーマや結果図を修正されていた姿勢に並々ならぬ決意を感じました。当日のご発表を通して、助産師としての様々なフィールドで得られた臨床経験を通して、臨床感覚に溢れた研究テーマを導き出され、現場の質の向上に努めたいという気概をひしひしと感じました。大学教育と修士論文を並行しながらの生活は大変だと思いますが、ぜひ臨床に還元できる価値の高い論文へととなりますよう応援しております。ご発表ありがとうございました。また、阿部先生には、当日までの嘉陽田さんとのやり取り、および、研究会当日のディスカッションにおいて、非常に的確で示唆に富んだご助言を頂き、手厚くサポートして頂きましたことに心より感謝申し上げます。

そして、嘉陽田さんが研究成果を来年の修士論文発表会にてご発表なさるのを楽しみにしております。

【SV コメント】

阿部正子（長野県看護大学）

今回は、第2SV として関わらせて頂きました。総合周産期母子総合医療センターで働く助産師のキャリア発達についてのご研究でした。当日準備された資料内容を時間内にすべて検討できずに申し訳なかったと反省していますが、その理由は最後に木下先生が統括でお話された“研究する人間”にこだわったからです。

「誰が何のために研究をするのか」という基本中の基本を押さえてなかったのです。事前に第1SV の長山先生にもその旨を伝えていました。レジュメの研究背景を読んだときに、キャリアという言葉がキャリア発達、キャリア開発、キャリア形成、キャリア問題、キャリア志向、キャリア発達過程とさまざまに用いられているのが気になり、また、継続教育、自己実現、バーンアウトという言葉も重要な概念だと感じましたが、それぞれが大きな概念なので、読み手にはいかようにも受け取られてしまい、研究者自身の問題意識が明確に伝わらないと感じました。さらに最後の段落では助産師の能力、助産師の力と表現されています。文献レビューは「いずれ行うデータの解釈の準備段階である(グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い p.107)」ことを考えると、言葉の揺れや一般的な概念が用いられていることは、研究者の探究したいものがいまだに曖昧であり、そうした影響は概念や定義、結果図に表れていると感じました。そのため、あまり先を急いで概念や結果図を検討するよりも、何を明らかにしたいのか、研究の意義は何かを問う必要があると考えました。また当日、発表者にも“今回の発表では最低限何を持って帰りたいか”を確認し、あのような進行となりました。

私も助産師として働いた経験や、助産師教育に携わる中で、助産師のキャリア発達をいろいろと考えてきました。特に今回は総合周産期母子医療センターという組織特性が明確な病院に勤務する助産師を分析焦点者としている強みとして、組織特性をもう少し分析の視点に組み込んでいけば面白い結果が示せるのではないかという感触がありました。その際、例えばMFICUやNICUなど加算されるユニットでの人員配置の特性を示した上で、助産師にどのような働きが期待されているの

かを説明すると、総合周産期母子医療センターが担う役割(組織の在り方)に則って助産師や医師、他職種の役割が整理され、そこでの助産師の立ち位置が見えてくるのではないかと考えました。さらに、この研究結果は誰が活用するのかをイメージするのも大事です。助産師だけではなく産科医、新生児科医、パラメディカル等にも活用されることを考えれば、結果の示し方をもっと工夫できると思います。

以上は第1SV にも伝えたいので、二人のやり取りをされているのを見守りました。お互いに仕事と準備の掛け持ちで大変なご苦労があったと思います。嘉陽田さんの研究成果が周産期医療システム下での助産師活動を示す有意義な理論を提示することに繋がり、ひいては助産師の実践能力やキャリア開発に活用されることを祈念しています。

【第2 報告】

石原 佳弥子 (一橋大学大学院言語社会研究科(修士課程3 年))

Kayako ISHIHARA : Graduate school of Language and Society, Hitotsubashi University

地域日本語教育を担うボランティアの日本語教育のあり方への意識の変化の考察

A study of changing perceptions of Japanese language education by language volunteers in community – based Japanese language classes.

1. 研究の背景と目的

日本語教育における「日本語教師」の数は2013 年度は31,174 人¹。その中で占める割合が一番多いのがボランティアで 17,673 人(56.7%)、次いで非常勤講師 9,408 人(30.2%)、常勤講師 4,093 人(13.1%)と続く。ボランティアの場合、参加のための特別な専門性は求められず、地域によって短時間の研修が行われることはあるが、日本語教育の専門性を得るには到底足りないものである。しかし、文化庁は、2010 年に「生活者としての外国人」に対する日本語教育の体制を整備するために、従来の地域日本語教育の内容の改善を検討している。日本語教育の内容・方法を確立する成果物としてカリキュラム案、ガイドブック、教材例集、能力評価、指導力評価についての冊子を5点作成し(「5 点セット」と呼ばれている)、各地のボランティア日本語教室に配布している。文化庁のこのような動きは、専門的知識を持たないボランティアが地域の日本語教育を担うことには無理がある²とする主張の中で、今後、さらに地域日本語教育の中心にボランティアを置くことを期待する流れと見ることができる。

修士論文では、実際に日本語教育に携わるボランティア(その多くが日本国籍を有する母語話者)が、その活動に関わることで日本語教育のあり方への意識がどのように変化するかという過

¹ 文化庁『平成 25 年度国内の日本語教育の概要』に基づく。

² 森本(2001)

程を考察する。その中で、母語である日本語への潜在的な意識の変化も考察できるものと考えている。そして、日本語学習者(特に、外国人定住者)が習得すべき日本語とはどのようなものなのかということまで考察を進めたい。ボランティアが持つ日本語教育に対する意識と日本語への意識はビリーフスとともに接触場面に大きな影響を与えるものとする。よって、地域日本語教室の現状を明らかにするものであり、本調査での考察が今後の支援に寄与するものとする。

2. なぜ M-GTA を活用し、他の方法理論を活用しなかったのか。

第一に、地域日本語教室におけるボランティア活動は、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わるものであること。第二に、地域日本語教室の役割が日本語支援であっても生活支援であっても、どちらもヒューマンサービス領域に含まれるものということ。第三に、ボランティア経験の有無が日本語教育に関する意識をどのように変えるのかその影響を調査する本研究がプロセス的性格を持っていると考えられること。以上、3点から M-GTA を活用することが適当と考えた。また、ボランティアが直面している実態から社会的相互作用に関係する人間行動の説明と今後の予測について綿密に考察するためには質的調査がふさわしいと考えた。

3. 研究テーマ

「地域日本語教育を担うボランティアの日本語教育のあり方への意識の変化の考察」

4. データ収集方法と範囲

4-1. 分析焦点者

- ・地域日本語教室で活動する日本語ボランティア。
- ・現在 8 名のインタビューを終了。6 名の逐語記録の作成を終えて分析。
- ・最終的に 10～15 名の調査協力者を想定している。

4-2. データ収集法

- ・各地域の日本語教室へのフィールドワークを通して、活動中のボランティアの授業を実際に見学させていただき、実際に日本語の支援を行っていると考えたボランティアに直接調査の協力を依頼し、承諾を得られた場合のみインタビューを行った。経験年数は考慮に入れていない。
- ・調査協力者の所属する教室は都内近郊にあり、調査対象者各々すべてが異なる団体に所属している。
- ・1 対 1 の半構造化インタビュー。面接は対象者ごとに 1 回、時間は 1～2 時間程度を目安とした。すべての調査協力者にインタビューガイドを用いて面談を 1 回行った。
- ・インタビュー内容は調査協力者の承諾を得て IC レコーダーに録音し、必要であればメモを取った。
- ・研究目的、研究方法について調査者に口頭及び文書で説明し、同意のうえで同意書に署名を得た。
- ・現在 6 名のコーディングを終えている。

【インタビュー協力者の属性】表 1

		性別	年代	ボランティア歴	背景	日本語教育講座	習得外国語	海外経験	インタビュー時間	調査実施日	出生地
1	nM	女	70代	24年	家事従事者	420時間修了	英語・スペイン語	無	65分	2015.02.19	兵庫県
2	nS	女	70代	13年	定年退職元会社員	市町村実施の講習会	中国語・スペイン語・朝鮮語・モンゴル語・エスペラント語	有	93分	2015.03.05	福岡県
3	nY	女	70代	18年	家事従事者	通信教育(420時間未満)	英語・インドネシア語	有	67分	2015.02.23	石川県
4	nK	女	50代	20年	家事従事者	市町村	英語	無	90分	2015.02.27	神奈川県
5	nE	女	40代	20年	会社員	420時間修了	英語・中国語・韓国語	無	98分	2015.02.27	東京都
6	nT	男	70代	2年	大学非常勤講師	市町村実施の講習会	英語・スペイン語	有	80分	2015.03.04	東京都
7	nF	女	60代	6年	家事従事者	市町村実施の講習会	中国語・英語	有	111分	2015.05.15	静岡県
8	nN	女	40代	7年	家事従事者	420時間未満/市町村実施の講習会	英語	有	96分	2015.05.22	東京都

5. 3つのインタラクティブ性のうち、1つ目と3つ目に関する具体的内容と考え

5-1. データ収集段階における協力者と研究者

半構造化インタビューを用いて、「外国人学習者に求める日本語能力」についての質問を中心に行った。協力者は、地域の日本語教室の支援を行っているボランティアである。ただし、日本語教育について専門的知識を有しておらず、日本語教師の経験も持たない者が多い。日本語教育、日本語支援に興味があったというよりも、ただ単に「異文化交流がしたい」、「勉強中である外国語が使える機会だ」などという気軽な動機から日本語支援のボランティアを始める人も多い。

一方、研究者は、職業としての日本語教師であるが、以前から、地域の日本語教室にボランティアとして関わっており、現在も週に一度、地域の日本語教室でボランティアを続けている。データ収集時には、研究者自身もボランティアの一人として協力者に共感しながらも、研究者として独立した目を持つことに極力努めた。

5-2. 分析結果の応用段階における研究者と応用者

研究者は日本語教師であり、地域の日本語ボランティアの一員でもある。ボランティアの活動と役割を知るための1つの手段として日本語教育への意識を明らかにするとともに、地域の日本語教室の抱える課題を明らかにし、今後の教室の在り方に少しでも寄与できることを期待する。

6. 分析テーマ

「地域日本語教育を担うボランティアの日本語教育のあり方への意識の変化のプロセス」

7. 現象特性

軽い気持ちで始めた日本語支援が、実は日本語教育という専門性の点からも、学習者をサポー

トするという生活支援の点からも軽い気持ちでは続けることができない、かなり大きな責任の伴う活動だという事実を知る。それでもボランティアは、活動を通して学習者と関わり、相互理解が深まる中で安易に活動を辞めることができずなくなっていく。しかし、日本語の教え方や生活の支援の仕方など様々な課題が尽きず、日々葛藤を抱えて悩みながら活動を続けるという現象。

8. 結果図とストーリーライン

8-1. 結果図

回収資料参照

8-2. ストーリーライン

回収資料参照

9. 分析ワークシート

回収資料参照

ボランティア(分析焦点者)が「地域の日本語教室のボランティア活動に関わることで、地域日本語教室のあり方と、地域日本語教室で扱う日本語に対してどのような意識をもつようになったか」ということを問いかけながらデータを分析し、概念作成を行った。

10. カテゴリーの生成

カテゴリーの生成の方法について【広い視野】というカテゴリーを例に〈相対的な視点〉〈日本社会の常識は不問〉〈他文化への興味〉〈異文化とつながる〉との関係を説明する。

地域日本語ボランティアの活動を通して、日本語を媒介として学習者の国や文化に興味・好奇心を抱き〈他文化への興味〉を持つようになる。他者の文化に興味を持ち他文化を知ること、文化を〈相対的な視点〉からとらえられるようになり、自文化を相手に押し付けないという姿勢、つまり、〈日本社会の常識は不問〉とする姿勢をボランティアは持つようになる。日本社会の常識を相手に強要しない態度は、相手の文化、〈異文化とつながる〉ことをより容易にし、さらに相手の文化を知る機会を得ることを可能にする。このような好循環の状況が、ボランティアに以前より【広い視野】を有することを可能にした。

11. 分析を振り返って

結果図の作成が難しかった。カテゴリー間、概念間からイメージが浮上するという感覚がつかめず、恣意的な図になってしまった。結果図を作成するときに、特に注意すべきことや心がけることなどがあつたら、今後のためにもぜひ教えていただきたいと思った。

分析中は絶えず自分の分析が浅いものになっていないかという不安を感じていた。分析が浅くならないように、概念生成の際には、分析焦点者の視点を意識するように心がけ、「活動を通して日本語教育をどのように見ているか」と問いかけながら分析を進めたが、この方法が正しかったかど

うかよくわからない。概念生成を進める中で、当初は、日本で生活する上で必要な日本語について、ボランティアが〈初級レベルの日本語を信奉〉しているという概念のみが生成されたが、類似例、対極例の視点からデータをさらに分析した結果、まったく相反する概念が生成されたので〈「初級神話」の否定〉という名前を付けて加えることにした。

12. 言葉の定義

12-1. ボランティアの定義

都内の日本語教室で活動する日本語ボランティアを対象とする。文化庁(2015)は、「ボランティア」を「原則として、日本語教育に対する報酬を受けない者(交通費としての実費は報酬とみなさない)」としているが、本稿ではこれに薄謝を受ける者も加えて定義をする。実際は、実費としての交通費、または、教室に所属するボランティア全員に一律の金額が支払われている例も散見するが、いずれも少額であることからこれらを受け取る者もボランティアとして含む。

また、本稿で使用する「ボランティア」という言葉は、すべて「ボランティアを行う人々」を意味するものであって、その活動などを指すことはない。

12-2. ボランティアの日本語教育の知識の有無

日本語教育に関する知識の有無については問わない。教育機関などで実際に日本語教育に携わる専門的知識を有する者についても、専門的知識・日本語教育の経験の全くない者についても、上記の「ボランティアの定義」を満たしている場合はすべてを「ボランティア」と呼ぶ。

12-3. 日本語ボランティアの特徴

富谷(2010)によると、市民ボランティアは子育てが終わった 40～60 代の専業主婦を中心とする女性と定年退職後の 60 歳以降の男性が圧倒的多数を占めるという。

12-4. 「定住者」の定義

出入国管理及び難民認定法³では、「定住者」は、「法務大臣が特別な理由を考慮し一定の在留期間を指定して居住を認める者」と定義されているが、本稿では、一般的な言葉として「定住者」という言葉が使用される際にどのような人々をイメージするかを質問し、その上で質問項目を尋ねるという手法を取った。それは第一に、日本語ボランティアがどのような人々を外国人定住者とみなしているかということを知りたかったためであり、第二に、対象を明確にすることでその後に続く質問項目に対してより具体的に答えてもらえたと考えたからである。

調査協力者がイメージする「定住者」については、「日本人を配偶者に持つ人」、「一時的に日本で仕事をしている人」、「難民」、「在日韓国・朝鮮人」、「中国人帰国者」などがその答えとして挙

³ 出入国管理及び難民認定法第七条第一項第二号の規定に基づき同法別表第二(平成2年法務省告示第 132 号)

がった。

12-5. 「ビリーフ(ス)」の定義

星(2015)は「地域日本語教育」にかかわる人々の活動の在り方と意識と「ビリーフ」を明らかにしている。本稿における「日本語教育についての意識」は、言語教育、言語学習で使用される「ビリーフ(ス)」ではない。「ビリーフ(ス)」とは学習の際に学習者、教授者が持つ学習観であり、信念などと呼ばれることもある。Horwitz は、「ビリーフ(ス)」とは、学習者(教授者)の経験、文化、個人的特性など様々な背景に影響を受けて形成されるものであり、学習に影響を与える重要な要因としている。Horwitz(1987)が開発した学習者の言語学習についての信念(ビリーフ)を探るためのアンケート法、Beliefs About Language Learning Inventory(BALLI)に基づいた研究も多い。一方、本稿における「日本語教育のあり方への意識」とは、日本語教育を概観し再考するためのものであって、単なる方法論に関わるだけのものではない。どのような日本語の知識が求められ、どのような言語能力が必要かということを問うものである。

13. インタビューガイド

①日本語ボランティアを始めた動機

②所属する日本語ボランティア教室の詳細

- 所属する日本語ボランティア教室について教えてください。
- 学習者について。担当している学習者は、日本に定住する外国人と考えますか。
- 「定住者」とはどのような人だと思いますか。
- あなたの所属する日本語教室は「生活支援型」ですか、「日本語指導型」ですか。
- あなたの教室はレベル分けをしていますか。

③外国人学習者に求める日本語能力

- 日本で生活をするうえで、学習者は積極的に日本語を習得したほうがいいですか。特に必要ないですか。
- あなたが支援している学習者は、最終的にどのレベルの日本語能力に達すると思いますか。
- あなたが所属する日本語教室で勉強すれば、あなたが必要だと考えるレベルに到達することができると思いますか。
- 習得したほうがいいのかと考える表現、文法などがありますか。
- テキストを使用していますか。
- ボランティア教室の学生も積極的に日本語能力試験を受けた方がいいと思いますか。
- 外国人が学習している「日本語」と日本の子供が学習している「国語」は違うものだと思いますか。
- 日本語ボランティアとして日本語に対してどのようなイメージを持っていますか。(自由にお答えください。)
- 日本で生活をするうえで、学習者が絶対に間違っても使わない方がいいと思う表現などがあ

りますか。

④ボランティア活動を通して変わった言語意識の有無と詳細

- 日本語を支援していて教えることが難しいと思うことはありますか。
- 日本語ボランティアを始めて、ご自身の意識が変わったことはありますか。
- 日本語があまり話せない人とも友達になれると思いますか。
- 日本語があまり話せない友だちが何人いますか。
- 日本語ボランティアを始めて、日本人が使用する日本語(テレビ、若者言葉など)についての意識が変わりましたか。
- 日本語ボランティアを始めて良かったことがありますか。

14. 参考文献

- 池上摩希子(2011)「地域日本語教育の在り方から考える日本語能力」早稲田日本語教育学 (8・9)、85-91.
- 岡崎眸(1999)「日本語ボランティアと日本語教師—自己認知をめぐって—」『お茶の水大学人文科学紀要』
- Ohri Richa(2005)「共生」を目指す地域の相互学習活動の批判的再検討—母語話者の「日本人は」ディスコースから—『日本語教育』126、134-143.
- 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA』弘文堂
- 木下康仁(2003)『グラントッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 鈴木淳子(2012)『調査的面接の技法〔第2版〕』ナカニシヤ出版
- 富谷玲子(2010)「地域日本語教育批判—ニューカマーの社会参加と言語保障のために—」『神奈川大学言語研究』32、59-78.
- 西口光一(2008)「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』、24-32.
- 野々口ちとせ(2010)「地域日本語学習支援の談話分析:言葉の機能と発達を中心に」『言語文化と日本語教育』Vol.40、62-65.
- 文化審議会国語分科会(2010)「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」
- 文化審議会国語分科会(2011)「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案活用のためのガイドブック」
- 文化審議会国語分科会(2012)「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案教材用例集」
- 文化審議会国語分科会(2012)「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について」
- 文化審議会国語分科会(2013)「生活者としての外国人」のための日本語教育における指導力評価について」
- 文化審議会国語分科会(2013)「生活者としての外国人」のための日本語教育ハンドブック」
- 文化庁文化部国語課(2015)「平成25年度国内の日本語教育の概要」
- 星摩美(2015)「地域日本語教育」にかかわる人々の活動を形作る意識とビリーフス」『人間社会環境研究』29、17-34.
- 細川英雄(2008)「日本語教育における「実践研究」の意味と課題」『早稲田日本語教育学』3、1-9.

丸山敬介(2013)「ボランティア日本語教室の組織と運営—日本語教育機関との比較において—」『同志社女子大学総合文化研究所 総合文化研究所紀要』30、121-139.

森本郁代(2001)「地域日本語教育の批判的再検討」野呂佳代子、山下仁「正しさ」への問い」三玄社、215-247.

Horwitz, E.K.(1985) Using Student beliefs about language learning and teaching in the foreign language method course. Foreign Language Annals.

Horwitz, E.K.(1987) Surveying Student beliefs about language learning. In A Wenden, & J. Rubin, Learner Strategies in Language Learning, Prentice-Hall International.

Labov, W.(1966) The social stratification of English in New York City. Center for Applied Linguistics.

★指導教員による研究指導の回数と時期

1回(2015.5)

★研究計画書提出・発表の義務の有無

すでに提出済み

★ゼミ発表や中間発表の回数と時期

2回(2015.5、2015.7)

★研究会や勉強会での発表の回数と時期

特になし

★外部指導教員の活用の有無(回数、時期)

無

★執筆開始の時期

本発表後すぐに着手したい。

○会場からいただいたコメント

- ・文化庁は「地域日本語教育」という言葉を積極的に使っていない。「生活者のための日本語教育」という言葉を使っているはずである。その中で「地域における日本語教室」という言葉を使用している。
- ・文化庁はボランティアに日本語教育を積極的にやらせようとしているというのは違うと思う。なぜなら、文化庁は平成 25 年にこれからの日本語教育推進のための基本的な考え方を整理し、その中に人材、ボランティアをどう扱うかというのがある。また、もっとさかのぼって言えば 2010 年の調査の結果、2011 年、日本全国の各自治体の行っている日本語教育に対する調査(アンケート調査)を行った報告書があるが、そこには「日本語のボランティアに教えることは認められていないにも拘らず、教えたいボランティアや教えたがるボランティアが多いことが問題」という事が指摘されている。
- ・「ボランティア」の定義が曖昧。今回の調査における「ボランティア」が指導者なのか、コーディネーターなのか、協力者なのかということをはっきりさせてほしい。

- ・生活支援などしながらうまくいっている事例もあるはず。そのような反対例も探していく必要があると思う。分析視点を変える必要があるのではないかな。
- ・結果図の始点の概念がおかしい。その前にもっといろいろな気持ちが入るはずである。
- ・「言葉の本質がわかる」という表現はおかしい。言語哲学などですごい人たちが言葉について研究しているので、言葉の本質とはそのような人でなければわからないものではないかな。
- ・結果図は分析がきちんとできているかの確認であり、論文を読むときに参考になるものである。結果図がうまく書けないということは、分析がうまくできていないことである。概念と概念の関係がうまくできていればそんなに苦労しないはずである。結果図がうまく書けない場合は、分析をもう一度見直した方がいい。そんなに難しいはずはない。
- ・分析テーマと結果図に隔たりがある。
- ・分析テーマをもう一度考えた方がわかりやすいものになる。分析焦点者の動機も「日本語教育の在り方」と関わるものではない。どうして今回、このような調査協力者を選び、焦点を当て、どういう研究をしたいかということをもう一度再考したほうがいい。
- ・ボランティアがうまく教えることができないところを描くのが面白いと思うのに、結果図とストーリーラインにはいいことしか書かれていない。何を意図しているのかわからない。
- ・重要な気づきがあった場合、その気づきをもっと詳しく調べるために誰に聞けばいいのかということ考えた上で調査協力者を探すことを自分はいつもやっている。M-GTA の場合もそのような方法を実施しているのか。
- ・日本語ボランティアのイメージを具体的にするために事例分析があるとよりわかりやすいものになるのではないかな。「4-2 データ収集方法」で、「実際に日本語の支援を行っていると考えた」とあるが、それはどのような基準で判断したのか。その点を明らかにする必要があると思う。その上でプロセスを明らかにすると焦点がどこにあるのか、自分がどういう判断をしているのかということがより鮮明になると思う。
- ・「日本語習得は必須」というコアカテゴリーの主語が、対象者と焦点者の両方になっていてわかりにくい。カテゴリーの主語は統一するべき。
- ・「教育」をどのように捉えているのか。教育は言葉、または、ものを教えること全てに関わることで、その点をよく考慮に入れて進めてほしい。

○感想

この度は、発表の機会をいただきましてありがとうございました。

SV の松戸先生には、細かいところまで見ていただき、ご指摘をいただきましたことを心から御礼申し上げます。小倉先生にも広い視点からご助言をいただきまして勉強になりました。

実際に分析を行いました、分析焦点者を含めて研究に対する焦点が定まっていないことに気づき、先行研究などについても詰めの甘いところがあることがよくわかりました。

フロアからいただいたご意見もどれも大変参考になりました。実は、これほどたくさんの方からご助言、コメントをいただけるとは思っておりませんでしたので、たくさんの方からいろいろなご意見を

いただきまして良い経験になりました。私自身が研究に対して絞り込みがまだまだ甘く、不十分だということが露呈するという結果になってしまいましたが、発表を終えてわかった多くの課題を今後どのように解決し、論文を進めていくか今、考えているところです。

【SV コメント】

松戸 宏予（佛教大学）

1. 研究会前のセッションの確認点

石原佳弥子さんの SV をお引き受けした時に、修士論文における M-GTA を用いた研究がどのような位置づけにあるのかを確認させてもらうことから、セッションは始まりました。

そして、主に発表要綱に沿っての確認作業を通して、研究の背景と目的から結果図までを、ご本人に整理してもらう形をとりました。

2. 研究者の背景

ご本人の言葉を借りるならば「職業としての日本語教師であるが、以前から、地域の日本語教室にボランティアとして関わっており、現在も週に一度、地域の日本語教室でボランティアを続けている・・・」とあります。

研究会当日のセッションで、フロアから「（文化庁では）地域在住の協力者は指導することは求められない」という指摘がありました。しかし、実際の現状はどうか。石原さん自身もボランティアの1人として日本語教室に関わるからこそ、文化庁の示すガイドラインと現状に温度差があることに疑問を持ち、研究と言う形で、日本語教室におけるボランティアの現状を客観的に捉えられないか、地域の日本語教室を支えるボランティアに支援できないかといったことが前提になっているのではないかと思います。

3. 分析テーマと現象特性

ただし、石原さんのなかでは、すでに現場を通してさまざまな問題が見えていたのかもしれませんが、そのことが、逆に、研究テーマの答えに向かうための、アプローチの切り口（これが分析テーマになりますが）にずれが出てしまったのかもしれません。分析テーマと現象特性が一致できなかった、あるいは、結果図が府に落ちなかったなどは、分析テーマのずれによる影響だということが、研究会のセッションを通じて、私自身も改めて勉強させて頂きました。

4. 研究会のセッションを通じた気づき

しかし、研究会のセッションを通じて、フロアとのさまざまなやりとりのなかで、石原さん自身が、分析テーマの修正を認識されました。地域で日本語教師ボランティアを行う者の葛藤が深まっていくプロセスではないかということに気がつかれました。修士論文の研究の目的の1つである“地域日本語教室”の現状を明らかにすることにもつながるかと思います。

また、フロアからも意見がでましたが、地域における日本語教師のボランティアの成功例について理論的サンプリングを行うことも、現場を支える“地域における日本語教師のボランティ

ア”の存在を浮かび上がらせるかもしれません。

何を明らかにしたいのか、研究の目的と、研究の道筋、そして、研究の基軸(石原さんの場合は、ここが M-GTA の活用なのかもしれませんが)をしっかりと定めることが、石原さん自身の納得する修士論文につながるかと思いました。どうかがんばってください。

【SV コメント】

小倉 啓子 (ヤマザキ学園大学)

日本語教室のボランティア日本語教師は狭い意味での専門的日本語教師ではなく、日本語を教えることを通じて、定住をサポートしていると感じました。日本語を教えるという目的で始めたのに、それにとどまらず他の日常的な援助もすることになるという展開はヒューマン・ケアの本来の姿かもしれません。高齢者支援でも地域包括センターがあるように、定住者は縦割りで日本語を教えられているのではなく、複雑で多様な生活を支える日本語学習を望んでいるのではないのでしょうか。その点で本研究の協力者の活動は意義あるものと考えます。

生成された概念のなかで、私は「日本語支援は生活支援」がとても有用な概念と感じています。ボランティアは、日本語指導を通して、相手のニーズに合わせ、関係性や関わりの中身を柔軟に展開しているという状況を的確に捉えているからです。教室で一定のカリキュラムを通して接する専門家とは異なり、ボランティアという曖昧で柔軟な立場にあるからこそ出来ることなのでしょう。

一方、ボランティアにとっては自分の守備範囲が曖昧で流動化するため、役割の範囲が揺らぎ、何をどこまで？という葛藤を抱くこともあるのではないのでしょうか。男性ボラが孤立しがちなのも多様で流動的で複雑な生活場面の問題を処理する経験が少なく、会社的で画一的、規範的な対処の仕方になれているからかも知れないと想像しています。

木下先生が言われたように日本語教育や日本語意識の点に絞るのではなく、日本語を教えるという限定されたケアから、新たなケアが展開していくボラ活動のダイナミックなうごきを視野に入れることが出来る研究と思います。

【第3報告】

伊藤 由美子 (南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻)

Yumiko ITO : Graduate School of Humanities Program in Educational Facilitation,
Nanzan University

大卒難聴者の職場適応へ向かうプロセス

Process toward the workplace adaptation of the person with university graduate

hearing loss

1 問題意識の芽生え

◆通常学校において、ろう学校とは異なり、難聴児・者は授業サポートに消極的である。

⇒「特別視されたくない」「きき取れていないことを知られたくない」

一般に聴覚障学者は難聴者、中途失聴者、ろう者と分けてかんがえられているが、「WHO の考え方」「医学モデル」「教育現場」「コミュニケーション手段」「聴力損失時期」「当事者の考え方」などあり、はっきりと決められていない。

表 1-1 WHO 国際障害基準と医学モデル（わが国の身体障害者障害程度等級表を基に筆者作成）

WHO による聴覚障害の定義		医学モデル（聴覚障害程度等級）	
Grade		等級	聴覚障害
1-Mild 軽度	26-40 デシベル		
2-Moderate 中等度	41-55 デシベル		
3-Moderately Severe 中等度に含む	56-70 デシベル	6 級	両耳の聴力レベル 70 デシベル以上 一側耳 90 デシベル以上、他側耳 50 デシベル以上
4-Severe 高度	71-90 デシベル	4 級	両耳 80 デシベル以上 両耳による普通話声の語音明瞭度 50%以下
5-Profound 高度に含む	91 デシベル以上	3 級	両耳 90 デシベル以上
		2 級	両耳 100 デシベル以上（両耳全ろう）

表 1-2 平均聴力レベル（良聴耳）とコミュニケーション障害の関係—小寺（2000）

26dB～39dB：	会話のみ聞き取りにくい。静かな場所での女性の 4, 5 人の集まりで、声が小さい人の話を正確に理解できない。
40dB～54dB：	普通の会話でしばしば不自由を感じる。大きい声で正面から話してもらえば会話を理解できる
55dB～69dB：	大きい声で話してもらっても会話を理解できないことが少なくない。後方で行われている会話に気付かない。
70dB 以上：	非常に大きい声か、補聴器使用による会話のみ聴取できる。会話が聴取できても聴覚のみでは理解できないことが多い。

◆聴覚障害系卒業生の離職率は一般労働者と比較してもそれほど高くない（石原, 2009）

厚生労働省の調査結果によると、一般大学卒業者の 31.0%が 3 年以内に離職している「厚生労働省 (2010)」。また、聴覚障害者を対象とした高等教育機関である筑波技術短期大学（現筑波技術大学）の調査 (2009) によると、転職を具体的に考える時期は入社後 3 年目以降

が多いと示唆されている。

- ◆コミュニケーション不全による心理的問題を抱えている
 - ・一人ひとりきこえ方の異なるデリケートな障害である。
 - ・ききとり難さを健聴者に理解されない。
- ◆アイデンティティ形成が困難な状況で成長している

} 難聴アイデンティティを
もちにくい

- ◆難聴者同士のつながりが少ない
- ◆情報やコミュニケーションが不可欠となる職場において適応困難がある
 - たとえば ・複数人物との対話が必要である
 - ・電話対応をしなければならない

2 先行研究との重なりと差異

<先行研究より>

- ◆なぜアイデンティティ形成が困難な状況で成長するのか
 - ・専門家の意見が反映される「(補聴手段を用いれば)特別な支援は必要ない」(河崎, 2008)
 - ・健聴者も大学 3 年から卒業までの時期は、進路決定を中心とした現実生活の課題との関係で自分自身のアイデンティティを洗練させていく重要な時期である。(杉村, 2005)
- ◆難聴者の心理的問題を規定する要因
 - ・補聴器交付条件の境界に位置している
 - ⇒WHO 国際基準では、41 デシベル以上の人は補聴器を必要とされている。わが国は医学モデルを採用し、両耳聴力 70 デシベル以上(あるいは、一側耳 90 デシベル以上、他側耳 50 デシベル以上)を聴覚障害者と規定している。(小寺, 2000)
 - ・職場におけるコミュニケーション問題がある
 - ⇒時間のズレ 内容のズレ 複数人数での会談・雑談が難しい 過半数の聴覚障害者は研修をあきらめる。(水野, 2014)
 - ・外からみえない障害である
 - ⇒健聴者と自分より重度の聴覚障害者との境界に生きることの難しさ(藤巴, 2002)
 - ⇒音声コミュニケーションを共有できない、場違いな行動や言動をしてしまう、難聴であることを知られたくない(山口, 2003)
 - ⇒きき取れないための誤解・誤行動による周囲の評価により低い自尊感情をもつ(梶山, 2008)
- ◆一般的な職場適応に関する研究
 - ・「職場から必要とされ、自身もそれに応えるのが満足である状態」と定義し、双方向の視点を考慮している(菊池, 1991)
 - ・大卒者の初期適応過程において就職後の仕事・環境に関わる要因が大きいと示唆している(若松, 1995)

- ・就職活動における自己効力が高かった者の方が、仕事に対する意欲が高く、物事に対する関心も高い傾向にある (浦上, 1996)

◆難聴者の職場適応に関する研究

- ・障害受容を促進させた要因として「生き方のモデルとなる同障者との出会い」「理解ある健聴者との出会い」を挙げている (藤巴, 2002)
- ・職場でのコミュニケーション問題として健聴者の理解や配慮の有無が聴覚障害者の働きやすさと勤続志向に影響を及ぼすことを明らかにしている (水野, 2014)

<問題意識の明確化>

「アイデンティティ形成の困難な状況で成長し、外から見え難い障害であるため健聴者に理解され難く、心理的問題を抱えていること」や「職場で課題があること」は明らかにされている。

しかし・・・「難聴者は健聴者との相互作用により、どのように職場から必要とされ、難聴者も自分に課せられた役割を意欲的に応えていくのか」、具体的なプロセスは明らかにされていない。

研究の目的

難聴者の大学から社会への移行期(大学で就職を考え始めたときから入社後、適応へと向かっている段階まで)に自らの難聴と対峙し、どのような状況に遭遇し、どのように職場適応へ向かうのかを明らかにする。

健聴者も先行研究から職場適応まで変容はみられるが、難聴者は入ってくる情報の不十分さやコミュニケーション不全が認められることにより、難聴者特有の現象が考えられるからである。

3 M-GTA に適した研究であるか

①人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究

「話せるけど、ききとれない」難聴者が健聴者の職場で仕事をする上で、欠かせない難聴者同士、難聴者と健聴者の意思・感情・思考を伝え合いながら、職場へ適応していくという相互作用に関わる研究である。

②研究対象とする現象がプロセス的性格をもっている研究

難聴者が大学を卒業して、就職し、その職場に適応するまでを追うというプロセス性をもっている研究である。

③実践的応用の可能性がある研究

大学での支援体制整備への提言、職場の難聴及び難聴者理解・啓発、一般化可能範囲として本研究対象者と類似状況にある難聴者また高卒難聴者、現在、就労している難聴者や今後、就職を考えている難聴者にも部分的に本理論は活用できる。

4 分析テーマの設定

「20代30代大卒難聴者が自らの難聴に対峙し、職場適応へ向かうプロセス

- ・「職場適応」の定義について

本研究の「職場適応」とは、職場が彼を必要とし、障害に対する配慮があり、障害を超えて共に

働く環境が整えられ、難聴者も自分に課せられた役割に応えるのが満足である状態と定義した。

5 分析焦点者の設定

「大学卒業後約4年目以降の主として音声言語を使用し、現在就労している20代30代難聴者」

6 データ範囲の方法論的限定

<研究協力者の条件>

・大学卒業者

⇒高校までは独学でできたが、大学は教科書があまり使用されず、教官の裁量により授業が進められるため非常に困難な状況である(山口, 2003)。また、大学の授業サポートや就職活動を通して自身の障害に真正面から考えざるを得ない時期である

・卒業後約4年目以降

⇒葛藤や危機を経験している(若松, 1995)(山口, 2003)(石原, 2009)

<「難聴者」と限定>

各校に一人あるいは少人数在籍する一般大学卒業の難聴者は、難聴者同士のつながりが少なく、先行研究から深刻な心理的課題を抱えていることが示されていることから

7 現象特性の検討

関わりがもてない閉塞感から脱皮し、自分自身が活かされる場を見いだしていく現象。

8 対象者へのアクセスとデータ収集の展開

<対象者へのアクセス>

研究当初、対象者を入社約4年目と設定し、知人の紹介による2名にインタビュー調査を実施した。その後、該当する対象者に難航した。そのため入社約4年目以降の20代30代難聴者に年齢枠を広げ、各地の難聴者協会に出向き、10名の方に依頼することができた。

研究協力者 対象人数:10名(男性3名、女性7名) 年齢分布:20代3名、30代7名

対象者	年齢	雇用形態
Aさん	20代女性	障害者雇用⇒障害者雇用
Bさん	20代女性	障害者雇用
Cさん	30代男性	一般雇用
Dさん	30代女性	障害者雇用⇒障害者雇用
Eさん	30代男性	一般雇用⇒障害者雇用

Fさん	30代女性	障害者雇用(一般扱い)⇒障害者雇用
Gさん	20代女性	障害者雇用⇒障害者雇用
Hさん	30代女性	一般雇用(派遣)
Iさん	30代男性	一般雇用
Jさん	30代女性	一般雇用⇒障害者雇用

9 対象者へのアクセスとデータ収集の展開

<データ収集の展開>

面接期間:2013年7月～2014年4月

- ・面接日時や場所については、対象者と連絡を取り合い決定した。

調査方法:半構造化面接 1人、約60分～90分間

- ・調査対象者へ録音許可を得て、インタビュー内容をICレコーダーにより録音した。
- ・録音された内容の逐語録を作成した。

10 分析ワークシートの作成とヴァリエーションの選択(分析ワークシート例・・・別紙回収)

分析ワークシートを作成するにあたって

- ①データを読み込み、対象者の心の動きを捉えるようにした。
- ②ディティールが豊富で多様な具体例がみられるデータから分析を開始した。
- ③分析テーマに照らして関連している箇所に着目し、ヴァリエーション欄に記入した。

しかし

具体例に対する解釈として生成した概念は妥当なのかわからなくなり、概念生成は遅々として進まない。

中間発表(本研究会・・・2014年3月)後、データをさらに読み込むと・・・

分析テーマの「一進一退のプロセス」のようにデータでは現れないことに気づき、分析テーマを修正した。

そして・・・

分析テーマを念頭におき、データを何度も読み込むことを通して着目した箇所は、誰と誰(何)の相互作用なのかを考え概念生成を行った。

11 分析テーマの修正/データ範囲の確認

◆分析テーマについては修正を行った

「難聴者が職場で一進一退しながら適応へ向かうプロセスの研究」(本研究会中間発表)



「20代30代難聴者が自らの難聴に対峙し、職場適応へ向かうプロセス」

中間発表では、分析を始めたばかりであった。その後、面接データが増えるにつれ一進一退しながら一方向なプロセスで進まないことに気づいた。

- ・「難聴者」の属性をさらに限定⇒「20代30代の難聴者」
- ・「適応」を具体化⇒「障害受容(受援力)を含む」「職場の障害理解」(工夫)

「だれの?」「何のための研究?」「社会的意義は?」と問いかけ、分析テーマを考えた。

◆非正規雇用(派遣)の場合、転退職に関するプロセスが異なると考えられた。

⇒分析段階で、職場の障害理解と健聴者との関わりに関する語りをデータ範囲とした

12 オープン化における困難・工夫

◆解釈が甘くなる

- ・データの読み込みが足りない。自分の枠組みで概念を考えてしまう。
- ・概念生成方法を文献に依存したため、生のデータから感じられるものが希薄になり、四角四面な概念名をつけてしまった。

◆分析テーマを意識するために、分析ワークシート上部に分析テーマを書き込んだ。

◆理論的メモ欄の活用

- ・類似例と対極例の書き込み⇒概念同士の関係やカテゴリー生成において有効であった。また、必要な(欠けている)概念に気づき、新たな分析ワークシート作成につながった。
- ・誰と誰(何)の相互作用なのかを常に意識するために必ず記入した。
- ・概念名を修正する度に日付と共に記入した。

13 現象特性の再検討

自分が何者であるか、あいまいな状態にいる人が他者との社会的相互作用を通して、主体的な生き方へ転ずるプロセス

14 収束化への移行

◆概念の再検討・修正プロセスを経てキー概念をみつけ、ストーリーラインの骨組みがみえてきた。

「授業サポートを受けない」という葛藤→「ジレンマ抱え入社選択」→「不十分な情報」への不安→「窮地の決意(退職)」→「難聴理解ある会社」→「情報保障されて安心」→「適応への兆し」を見いだしていくプロセスがみられたので、結果図で表した。

- ・ストーリーラインの骨組みがみえてきたことがきっかけとなり、収束化へ移行した。

15 結果図の作成(収束化における困難)(結果図省略)

◆結果図は、実に何回も書き換えた。

- ・分析テーマを念頭に置き、コアカテゴリーの位置をどうするか、概念間の関係、カテゴリー間の関係をどのように図示するか、試行錯誤しながら修正を繰り返した。
(最初はフリーハンドでおおよその見当をつけた)
- ・他者の視点から分かりやすいものになっているか、ゼミで客観的な意見を聴いた。

16 ストーリーラインの作成と結果図の修正

- ・「一進一退」というようなプロセスにならないという気づきから結果図を修正
- ・概念の再検討を通して、その都度、結果図の修正をした。
- ・コアカテゴリー「難聴という障害」は大学から職場までどのような影響があるのか、どこに置くと適応へ向かう双方向循環になるのか試行錯誤しながら作成した。
- ・入社選択時がキーポイントになると考え結果図を修正
以上のように、結果図をみながらストーリーラインを理解できるようになるまで、結果図の修正をしたり、ストーリーラインを書き直したりを繰り返し修正した。

17 今後の研究の発展

障害者支援実践モデルとなる【難聴理解ある会社】として難聴者と共に働く健聴者を研究対象とする。

〈課題〉

- ・研究対象者を難聴学生、あるいは入社直後から4年未満の難聴者に設定⇒主として障害受容に関して
- ・雇用する側の障害者支援に関する実態調査
- ・難聴無理解な会社への提言⇒関係づくり(第三者機関に依頼できるシステム)

★指導教員による研究指導の回数と時期

- ・研究方法決定⇒2013年4月末
- ・1カ月に1,2回のペースで指導
- ・2015年1月9日:最終指導面談
- ・1月16日:修士論文提出

★中間発表の回数と時期

- ・第1回・・・2014年3月(本研究会にて)
⇒相互作用を通してどのような行動がみられたのか検討するよう指摘をいただいた
- ・第2回・・・2014年11月
⇒「結果と考察」なら、どこが「結果」の部分か、どこが「考察」の部分か、ひとつのストーリーとして読みにくいと指摘をいただいた。

★執筆開始の時期(M1は研究テーマの異なる研究・・・本論文はM2, M3)

- ・問題と目的:(M3)11月～12月・・・問題意識と先行研究が拡散し難航
- ・方法:(M3)11月・・・内容精選

- ・結果と考察:(M3) 11月～12月・・・難航⇒狭義と広義の考察に分ける
- ・総合考察:(M3) 12月～1月・・・難航⇒論文全体が一つのストーリーをもつ

※題目最終決定の時期

M3の1月・・・分析結果から論文提出間際に題目変更

主要引用・参考文献(省略)

★会場からのコメント概要

- ① deafの方たちの研究は数年前からポツポツ出てきていて、先行研究も結構ある。障害者が入社することで、健聴者が違う発想をもち、前向きに障害者を採用するところが増えている。そういう点で(本研究は)障害者の就職に参考になる。
⇒水野(2014)の研究は、(ほとんど身体障害者手帳を取得している)重度聴覚障害者を対象としている。音声言語を使用しているが、複数人数での対話がききとり難い難聴者に焦点を当てた研究は非常に少ないと考える。
(SVの先生より)つまり、障害者と思いたくない。聴覚障害者として就職していない、だから困難がある。
- ② 障害雇用と一般雇用をみると、一般雇用が少ない。面接をしていて違いはあったのか？障害雇用の方が受け入れ側がきちんとしているのではないか。インタビューしていて混ぜても大丈夫と判断したのか、あるいは最初から大丈夫だと考えたのか？
⇒一般雇用か障害雇用か考えないで研究対象者を設定した。インタビューして雇用形態の複雑なケースに気づいた。障害者雇用入社しても一般扱いになり、ほとんど情報保障してもらえない。障害者雇用だから必ず情報保障があるとか、一般雇用だから情報保障はないというふう考える傾向にあるが、インタビュー(実際)では違っていた。一般雇用と障害者雇用を分けなくてよかったと思う。
- ③ 私も障害者雇用の職場適応について考えている。障害があることをオープンにする方と、敢えてオープンにしない方はいたのか？個人的には、障害をオープンにする方としない方とではプロセスの違いが出てくるのかなと思うが実際はどうであったか？
⇒はい。だから(障害をオープンにしない方は)大学のサポートも敢えて受けない。実際、障害があることを知られたくないという方は非常に多いと思う。一般雇用入社して、転職した方は、(最初から)障害者雇用入社した方と同じようなプロセスを辿っていた。両方のプロセスを含めて適応プロセスを表した。
- ④今後、M-GTAに取り組むうえで、分析ワークシートの上に分析テーマを書き込むことや、理論的

メモ欄を活用することが参考になった。概念生成で解釈が甘くなるとされているが、差支えなければ具体例を挙げてほしい。

⇒概念修正の度に日付と共に新たな概念を書き込んでいた。具体例として、「主体的環境改善」から修正を繰り返して「自分からサポート依頼」、あるいは「情報阻む職場状況」から「何を言っているのか分からない」、また「初めにつたえるべきこと」を「初めに難聴開示」が挙げられる。分析ワークシートの理論的メモ欄をみると、概念生成で試行錯誤していたり自問自答していたりしたことがよく分かる。

(SV の先生より)以前、SV を受けたときに具体的な難聴者ならではの概念や、難聴者の方が利用できる概念生成をすると指摘されたと思う。具体的にどのようにしたら職場適応していくことができるのか、つまり、相互作用がはっきり分かる概念名にしていくというSVを受けていると思う。その結果、よりリアルな概念になっていったと推察する。

⑤分析テーマをどのように考えて修正したのか、そのプロセスを詳しく話してほしい。

⇒中間発表時はデータがまだ 2 例しかない状態であった。自分の枠組みで捉えていると思うが、そのときのデータから「一進一退しながら」のプロセスがみえた。その後、何例かデータを読み込むと決して一方通行ではないということがみえてきた。研究者の視点が大きかったと思う。分析対象者の視点に立って相互作用をみることで概念の言葉も違ってきた。また、中間発表時にフロアから「ほんとうに一進一退でいくものなのか？」という疑問も出された。その後、SV の先生やフロアの方からの意見等を振り返り、さらにデータを読み込み、新たな気づきを得て修正した。

⑥私も職場適応の研究をしたいと考えている。この研究は適応に成功した方の研究なのかなと思う。何らかのかたちで失敗した方の状況も取り入れているのか？

⇒研究対象者で転退職した方は、10 名中 6 名いる。その中にはキャリアアップした方もいるが、精神的にギリギリの状態までいって、やむなく退職した方たちである。それを乗り越えたということで、現在、精神的に追い詰められている状況にいる方々の一つのモデルになるのではないかと考えている。

⑦(SV の先生より)コアカテゴリーは何か？キー概念、キーポイントだと気づいたきっかけは何だったのか？

⇒コアカテゴリーは「難聴という障害」「関係のプロバイダ」「難聴理解ある会社」「難聴アイデンティティ」。キーポイントは健聴者でもアイデンティティを洗練する時期だとされている「入社選択の岐路」である。ここを結果図に表すことが難しかった。「障害者雇用活用」と「一般雇用入社」をスッキリまとめたいという恣意的なものが働いていたのかなと思う。そして、現実をそのまま表した方が良いと考え直して書き表した。

⑧研究を通して一番SV がほしいと思った段階と、SV を受けて一番“目から鱗だった”というアドバイスを知りたい。逆にSV の先生からは、どのSV がこの研究に効果的であったのか。

⇒概念名がなかなか決めかねて困った。いくらテキストを読んでも理解できなかった。中間発表 (SV を受けたこと) が自分にとってははじめの一步であった。可能な限り定例研究会に出たことと、合同研究会もグループに分かれて分析テーマと分析焦点者に絞って検討できる絶好の機会であった。合同研究会では、同じ着目箇所でも自分の考え方と他者の考え方の相違がみえ、検討していくプロセスがとても良い生の学びの場となった。

(SV の先生より) 合同研究会は2年に1度しか開催されない。生データから分析テーマを作成するまで行う。同じデータを基にグループメンバー各自考えてきたことを討論しながら一つの結果図に作り上げていく作業である。研究会としては人気の高いものである。

(中間発表 SV の先生より) 分析テーマの絞込みを発表する前にメール等でやり取りした。分析テーマを考えるとときにどういう現象がみえているのかということをメールでやり取りした。分析テーマをしっかりと考えるということと、分析テーマは固定しているものではなく、データを進めて行くなかで修正して柔軟に対応していく。もう一つは、「一進一退」という単純なプロセスではないのではないか。大正大学にも難聴や視覚障害の学生がいて、情報保障をしているが、社会に出たら保障されているわけではないと考えている。丁度タイムリーな研究だと思う。分析データを読み込みヴァリエーション欄に記入する1, 2, 3のステップが非常にわかりやすい。

(SV の先生より) SV は、研究の目的、分析テーマ、分析対象者や概念の説明などがちゃんと説明できるのか、案外できない方が多い。今回の提示の仕方も本人は論文を何回もデータを読んでいるので分かっていると思うが、初めてみる私にとっては何のことを言っているのか分からないので、そこを何回もきき直して、みなさんに分かるようにパワーポイントを作ってもらった。だれにでも分かるような報告文を書くことが原点ではないか。だれにでも分かるようにしていくのがSVではないか。SVされて、誰にでも分かるように修正していく、その相互作用が大切だと思う。

★感想

はじめに、SV をしていただいた林葉子先生に深くお礼申し上げます。

自分の研究目的にM-GTAが適していると考え、一昨年4月に本研究会に入会しました。そして、どうせ研究するならM-GTAを自分のものにしようと、テキストの読み込みはもちろんのこと、可能な限り本研究会に出席し、中間発表もさせていただきました。SVの先生やフロアの方々からのご意見やご感想は、さらに研究を進めて行くうえで礎となりました。修士論文執筆は、提出間際まで修正に追われる日々が続きました。

今回の成果発表に際し、林先生からだれにでも分かりやすい報告文になるように、何度もご指摘をいただき、何とか、みなさまに報告できるかたちに仕上げることができました。林先生は大変お忙しいにもかかわらず、その日のうちに綿密なコメントを寄せていただき、先生の研究者としての真摯な姿に大変感銘を受けました。今後、社会に貢献するための第一歩として投稿論文執筆を目指します。今回の成果発表は、修論提出して半年経て、改めて修論を見直す機会となりました。また、発表後にフロアの方々から参考になったと声かけしていただき、少しでも本研究会に恩返しができたと、うれしく思いました。

本研究会に携わられている M-GTA の世話人の方々、参加者のみなさま、紙上にてお礼申し上げます。ありがとうございました。

【SV コメント】

林葉子（お茶の水女子大学）

修論発表会でしたので、SV といっても、どのように修論が作成されていたかを、M-GTA の分析過程に即して、わかりやすく発表していただくための SV でした。

研究テーマでも同じようなことが言えるのですが、自分では明確になっているつもりでも、それを他の人に説明することになると、案外、はっきりとしていないという経験は誰にでもあると思います。伊藤さんも、きっちりと修論を書き上げていらっしゃったし、すでに、他の場面で、ご自身の修論を発表なさっているのでも、最初の発表原稿でも、説明はかなり良くできていました。しかし、他分野のスーパーバイザーにとっては、その分野の研究者にとってはわかりきっている事も、理解しにくいことがありました。M-GTA 研究会は、いろいろな分野の方が参加されていますので、そういった門外漢にも理解できるようにしていただくために、少しだけ構成を変えていただきました。SV ごとに、わかりやすくなっていく発表原稿に、伊藤さんの発表に対する真摯な心持が伝わってきました。

M-GTA の基本は、研究者が、分析焦点者や、所属分野のために、何を明らかにし、どのように役立てたいのかをはっきりと自覚することだと思っています。今回の発表では、M-GTA で修論を書いた経験を、いかに、聴衆にわかるように説明するためには、研究の内容をどのように提示し、それと同時に分析過程や工夫などをどのように述べていくかということを目的にしていることを自覚し、ご自分なりの工夫をしていただきました。

M-GTA では、SV を通して、研究者自身が“気づく”ことが重要です。スーパーバイザーはそれをいかに引き出してさしあげるかという役割だけです。研究課題が有意義で、研究者が、心から、研究目的について明らかにしたいと思っていれば、ちょっと、後押しされるだけで、どんどん、重要なことに気づいて良いものが出来上がっていきます。伊藤さんの発表原稿もまさにそのような感じでした。そして、何よりも、伊藤さんが、これからは、“これから M-GTA を用いて分析しようと思っている研究者”のために、支援していきたいという気持ちを持ってくださったことは、今回の修論発表会の大きな成果だったと思います。伊藤さんの研究の中間発表の際に SV をしてくださった坂本先生も同じ気持ちだと思います。伊藤さんは、中間発表や、今回の修論発表会の SV を通して、研究者として後輩を育てていこうという研究者としての成長もあったのではないかと信じています。

伊藤さんには、これからも、定例研究会に出席していただき、“これから M-GTA を用いて分析する発表者”に良いコメントをしていただきたいと思います。

◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

- (1) 唐田^{からた}順子
- (2) 国立看護大学校
- (3) 看護学(母性看護学・助産学)
- (4) 妊娠期からの子育て支援、子ども虐待、発生予防、助産師、気になる親子

日本看護研究学会学会賞を受賞しました！！

日本看護研究学会第37巻2号(2014)に掲載された『産科医療施設(総合病院)の看護職者が「気になる親子」を他機関への情報提供ケースとして確定するプロセス—乳幼児虐待の発生予防を目指して—』が、平成27年度の学会賞を受賞しました。本当に驚きましたが、今までの分析の苦労が報われた気持ちがしました。自分の研究に少し自信がもてました。7月25日の修士論文発表会の際に会長の林先生に報告したところ、ニューズレターでみなさんに報告するようにと、言っていたのでこうして報告しています。

【研究会での報告で落ち込んでもくじけないで】

賞を受賞した論文は、博士論文の一部を執筆したもので、M-GTA 研究会では、構想発表と中間発表を行いました。報告をするまでに何度も研究会に参加し、分析テーマ、分析焦点者の重要性を認識し、プロセスの始まりと終わりを明確にすること等を理解したつもりでした。しかし、中間発表では・・・。「分析テーマをもう一度、プロセスという言葉を使って示してみて」、「分析焦点者の立場で分析したら、このような概念名にはならない」、「この研究で何が明らかにしたいの?」という鋭い助言の数々に、ちゃんと理解しているつもりだったのに・・・、とかなり落ち込みました。1ヶ月ほど分析のやり直しに取り組む気持ちになれませんでした。再分析の際、先生方の助言を頭に入れて行いました。すると、確実に分析がよくなったと自分でも思えるようになりました。スーパーバイザーの先生方の助言は「厳しいけれど温かい」と実感しました。

結局、分析は4つのテーマに別れ、分析の日々に追われその量に圧倒されそうになりながら、何とか博士論文を書き上げることができました。論文の投稿は、文字数制限との戦いでもありましたが、内容が精選される機会ともなりました。

このように、発表会でかなり落ち込んだ体験をしましたが、それが力となってその後の分析が進んだのだと思います。みなさんもどんどん発表して、落ち込んでもくじけないで、進んでください。

-
- (1) 斎藤まさ子
 - (2) 新潟青陵大学看護学部看護学科

(3) 精神看護学

(4) ひきこもり、経験者、家族

研究会に入会して4年経っているのですが参加するたびに、学びが多く研究への思いを掻き立てられています。

科研費をいただいて、共同研究者4名とともに、ひきこもり家族支援についての研究をしています。2年前に、ひきこもり家族の心理社会的変化のプロセスをM-GTAを用いて分析し、学会誌に発表しました。

今回はひきこもり経験者28名にご協力をいただき、面接調査を実施しています。

分析テーマに迷い、そのつど概念生成から見直し、わかりたいことがわかりそうなきにんやかんやで中断ということを繰り返してはや1年。期限に追われながら9月になったら本格的にやりたい！と少し胸をときめかせている日々です。

.....

◇第73回定例研究会のお知らせ

日時:2015年11月14日(土)13:00~18:00

会場:立教大学

.....

◇編集後記

今回の研究会では、2人の新しいスーパーバイザーが誕生しました。お二人とも、大変丁寧にSVされていて、今後のご活躍が期待されます。これからも、多くの方が、発表し、論文を執筆し、そして、後輩にSVできる方が増えていくことを願っています。スーパーバイザー養成講座も始まりました。M-GTAが普及するためにも、質の良い論文が発表されるように、質の高いスーパーバイザーの育成にも力を入れていきたいと思っています。皆様、ご協力、よろしくお願いいたします。(林)